



社会福祉法人  
ミッドナイトミッションのぞみ会  
マスコットキャラクター  
「ポッポ」



ホームページQRコード



QRコード

2025/12/1 **No.100**

発行者：社会福祉法人 ミッドナイトミッションのぞみ会

本 部：〒293-0023 千葉県富津市川名1436番地

## 機関紙「望みの門」 100号に思う



副理事長 木下 勝世

機関紙「望みの門」が  
今号をもって100号を  
数えることになった。第

1号が発行されたのは1976年10月1日である。木下弘人はこの号で巻頭言を「復刊の挨拶」と題して書いている。創刊号と名乗らず復刊としたのは、それ以前に同名の機関紙があったためである。それは日本ミッドナイトミッションによる機関紙で、すでに発行を停止していた。のぞみ会が新たに同名の機関紙を発行することになったことから「復刊」としたのであった。

第1号発行当時ののぞみ会を見てみよう。のぞみ会は1962年に婦人保護施設望みの門学園を経営する単一施設法人として発足したが、8年後の1969年には養護老人ホーム望みの門楽生園を設置した。さらに1980年には特別養護老人ホーム望みの門紫苑荘が誕生することになるが、このための具体的な準備に着手したのが1976年、すなわち機関紙「望みの門」第1号発行の年であった。

機関紙発行の意図の第一は関係団体、教会、

支援者への情報発信であるが、このタイミングでの機関紙「望みの門」発行にはそれなりの背景と意図があったと思われる。当時望みの門学園は木下ドーラが、また望みの門楽生園は木下弘人が施設長を務め、共同して施設運営を担っていた。しかしこの後は特別養護老人ホームを加え3施設を運営することになる。3施設は依って立つ法令・制度が違う。対象とする利用者が違い、事業の在り方も違う。職員数は飛躍的に増え、担当する職種も多岐にわたることになる。機関紙「望みの門」第1号は、このような状況を目前にして発行されたのである。3施設がそれぞれの違いを超え、法人として方向性を堅持して協力し、職員もまた様々な違いを超え、思いを共有して理解し合うことを願う。機関紙発行にはこうした思いが込められていたのであろう。

機関紙「望みの門」発行に込められたこの願いはその後変わらず引き継がれ、100回を数えるまでに至った。時あたかもクリスマスである。誕生したイエス様をベツレヘムに訪ねたのは、東の国の占星術の学者たちと、荒れ野にいた羊飼いたちだった。この組み合わせは実に異色である。学者たちは宝物をもって拝みに来た。羊飼いたちは仕事場から着の身着のまま駆けつけた。両者は身なりからして違った。言葉が違い、社会的地位も違った。しかしイエス様に会う時、これら

べての違いは消えた。神様は人間社会にある違いや人を隔てる壁を超えさせてくださる。クリスマスとはそういう出来事の始まりなのである。

現在、のぞみ会の働きは進展し、8施設、9事業を擁する総合福祉事業体になっている。それぞれの施設・事業の違いも職員構成の違いも、第1号発行時とは比べものにならない。のぞみ会の各施設と事業の違いを超えて一体性を保ち、相互理解に立って協働する必要も、比べものにならないほど増している。機関紙「望みの門」の果たすべき役割は一層大きく重いのである。

## その働きに連なるために

望みの門京葉後援会会長

松戸教会牧師 村上恵理也



機関紙「望みの門」第100号の発行に、心からの祝意と深い敬意をお届けいたします。

この100号という節目は、何よりもミッドナイトミッションのぞみ会（以下、望みの門）の従業員の皆さまの、長きにわたる献身的な働きの証左にほかなりません。「女性保護事業」と呼ばれた70年前から、社会全体の

意識転換が促され「女性自立支援」がうたわれる今日に至るまで、時代の要請は変われども、望みの門の皆さまは、終始一貫、キリストの心をもって利用者の方と向き合っていました。それも、乳幼児から年配の方まで、その生活そのものに寄り添う、多種多様な愛のわざです。

機関紙「望みの門」は、日夜、利用者の方と寝食を共にする職員の皆さまの働きの一端を、私たち後援者に知らせてくれます。これにより、後援活動をする私たちの祈りは具体的なものとなり、その具体的な働きに連なる者とされることを喜んでいきます。余談ながら、私は紙面のなかの、温かい食卓を想像させる食べ物写真にもいつも心惹かれていきます。白黒印刷であった機関紙は今やカラー印刷に。食べ物を含め、各報告がより視覚的にもわかりやすくなったと感じています。

同時に、この機関紙の発行の背後にある編集チームの働きを想像します。この発行のためには、原稿執筆者のご苦労はもちろんのこと、企画、原稿依頼・収集、編集・校正を担われる方々がいらっしゃるはずです。なかには日々利用者と向き合い現場を守る方もいれば、その背後にあって内外の事務的な働きを担われる方もいらっしゃるでしょう。

望みの門の働きは、その両者によって支えられ、地域社会の方に知られるものとなるの

でしょう。

ひとつの号が発行されるまでのご苦労はいかばかりか、それは私の想像に及びません。それを承知のうえ、お願いをすれば、これからも望みの門にかなしいえない独特のわざを担っていただき、加えて、その日々的一端でも私たちに知らせてください。

そうしていただくことにより、私たちも皆さんのために具体的に祈り、できる限りの後援活動を続けます。

機関紙「望みの門」第100号は、記念すべき節目であると同時に、次なる歩みへの新たな出発点としてください。社会の構造が複雑化するなかで、貧困、孤立、DVなど、「小さくされた者」を取り巻く課題は後を絶ちません。だからこそ、キリストの心をもって、変わることをない愛と希望を指し示し続ける「望みの門」の役割は、ますます重要になっていくことでしょう。

祈りを添えて筆を置きます。この大切な働きが守られ、祝されますように。そして、後援する者が機関紙を通してその働きを知らされ、祈りと支援をもって共なる歩みを続けることができますように。



# 望みの門に関わって

望みの門京葉後援会委員

船橋教会 鈴木 碧



機関紙1000号発行おめでとうございます。私は船橋教会員ですが、教会は兎に角印刷物が多い

ところです。自分の教会の会報、婦人会の報告、東京神学大学学報、千葉支区だより、教会婦人、青梅の虹などなど。活字中毒の私はどれも読まないではごみにすることはできないので、斜めに目を通して、心に残った記事を拾い読みしています。でも自分が望みの門京葉後援会の委員をしているからというわけでもないのですが、「望みの門」の機関紙だけは1ページの巻頭言から、最後の編集後記迄全部読んでいます。地味な、でも命に係わる大事なお仕事を懸命にされている一人一人の言葉が読んでいて心に届くからです。そして長いこと読んでいてお気に入りの書き手の方がいるのです。そのかたの文章はいつも必ずちょこっとユーモアがあつてくすつと笑ってしまうのです。こっそり、わたしの「推し」です。これからも楽しみにしています。

望みの門と船橋教会との関わりは古く、婦人会の大先輩故瀧口つね子姉が「望みの門京

葉後援会」初代の副会長でした。木下宣世理事長は、1972年から1988年まで、船橋教会の第9代の牧師でした。先輩の婦人方がドーラ先生が学園長をしていた望みの門学園に繕い物のご奉仕にかよっていました。私自身が望みの門に関わったはじめは、月一回の喫茶のためのお菓子作りの奉仕でした。何のケーキを作ったかは覚えていないのですが、いつも大きなボールで生クリームを泡立てていました。その日は必ず船橋の教会員で望みの門に転職した故中村親之兄が青堀の駅に迎えに来てくれていました。

船橋教会の望みの門京葉後援会委員をしていただく方が長老になられ忙しくなるので、子育ても一段落した私が委員になるようにと言われました。先輩の命令？を断ることもできず何もわからないまま後援会の委員になって今年で28年になります。数えたこともなかった

のでびっくりです。と一緒に委員をしていた沢山の方々が目に浮かびます。多くの方を天に送りました。初めは若い方だった私も今では○番目の高齢者です。長いこと続けてこれたのは、委員会での故石井錦一牧師はじめ木下宣世理事長、そして最近では村上恵理也牧師、真壁巖牧師のお話が毎回楽しみだったことに尽きます。

望みの門は神様のご計画の元に少しずつ時代の要請を受け入れて着実に発展している様

に思います。それには私などの計り知れないご苦労があるだろうと思っています。日々の歩みが無事でありますようにとお祈りしています。

## 今、振り返ると……

望みの門京葉後援会委員

西千葉教会 坂本 説子



望みの門会報100回記念出版おめでとうございます。このような記念の号に、原稿を寄せさせていただきます。このように感謝いたしま

す。私は23年前から、京葉後援会の委員として加入し、ご奉仕させていただいております。西千葉教会においては、このご奉仕は信仰歴の長い、熱心な方々が代々引き継がれてきていたもので、私に委員のお声がかかった時には、何かの間違いだろうと思っておりました。しかし、「勘違いの人選」からはじまった私の委員としての歩みですが、あれから20年以上過ぎてしまいました。京葉後援会の委員のメンバーも、高齢や体調不良の理由で、月日の流れと共に委員を卒業する方が増え、今では2名を除いて全員変わりました。気がつくとも私もいつのまにか「古株」の仲間に入っていました。委員のメンバーも変わりましたが、望みの

門の各施設での奉仕の内容も、20年前とは大きく変わりました。私知っている、西千葉教会でのご奉仕で例にあげると、一番メインの奉仕は何といっても「入浴介助」でした。1週間に火曜日と金曜日に奉仕があったので、月に8回あり、1回2名ずつの奉仕でしたので、単純計算してもひと月16名の奉仕者が必要でした。集会時に予定表を回して、自分の都合の良い日を記入していただいていた。予定が埋まらない時もあったので、ひと月に2回の奉仕の時もありました。現在の紫苑荘の多目的室の場所あたりに、「大きなお風呂」がありました。「入浴介助」は3階の居室から1階のお風呂場に送迎の移動と衣服の着脱が、私たち奉仕者の主な仕事内容でした。お話ししながら手をつないでの移動や、車椅子での送迎もありました。衣服の着脱は悪戦苦闘しつつ、回数を重ねることに学んでいきました。Aさんは右手を先に入れた方がやりやすいこと、Bさんは急がせるとダメで、ゆっくりの着脱が好みなど、一人一人の対応がわかってくると、着脱の手伝いにも余裕が出て、おしゃべりしながら大笑いすることもありました。今となっては貴重な経験であり、なつかしい思い出ばかりです。

この他にも多くのご奉仕があり、かわらせていただきましたが、どのご奉仕も沢山の学びがありましたことに感謝いたします。今

現在は、自分自身の高齢化もあり、思いあっても実現するのがなかなか難しくなっているのが現状です。最後になりましたが、望みの門は今までの歩みも、神様に道を示されつつ歩んできました。どうぞこれからの未来への道のりも、神様の大きな愛と御手に抱かれつつ、歩むことができますよう心からお祈りいたします。

## 機関紙望みの門100号に寄せて あれこれ思うこと

望みの門京葉後援会委員  
千葉教会 石城 典子



メリークリスマス！

「望みの門」の100号  
おめでとうございます。

私たちは機関紙により

望みの門の役割や働きの様子を一層知ることが出来ました。こんなに開かれた施設の冊子は他に知りませんし、なかなかお目にかかれませんが。長い間「望みの門」を纏めて発行してくださった委員の方々のご努力に感謝いたします。理事長初め職員さん、望みの門に関わってくださいている方々のご健康と更なる発展を心よりお祈り申し上げます。

「望みの門」100号を手にして、今迄当然のごとく受け取っていたことを申し訳なく

思いました。遅まきながら「望みの門」に心からのエールをお送りします。

さて、この機関紙にはキリスト教精神で仕えるということが随所に見られました。私は望みの門はキリスト教系なのだからあえていちいち唱えなくてもよいのではないかと感じたことがあります。しかし人は忘れやすいものですからこれは正解でしょう。人に知らせ自分にも言い聞かせる意味であると理解しました。事実長い年月の付き合いの職員の方々は昔も今も変わらずキリスト教精神で役割を果たしておられるように見受けられます。そして望みの門に就職した人、人事異動で不安に思っている人の言葉には世に言ういじめやハラズメントは無く先輩に対する感謝の言葉が述べてありました。巻頭は理事長始め関係ある各分野の先生方や職員の記事ですがいつも興味を持って読み深いお話に感心しました。簡単明瞭であと締め編集後記にもいつも注目しています。それから望みの門の記事は私に色々の気づきを与えてくれました。機関紙には公表されていない善行があると思います。公にはされないけれど立派な事案が色々ある事を察するべきでしょう。

今までの支援に反省しなければならぬ事が私には多々ありますがその1つ、バザーの記事を見ると盛大で楽しそうに記されていますが、私はやたら献品を募り何もかも届けて

しまいました。望みの門の方で処分に苦勞され、きつと処理する時間と費用がかさんだことかと思いいに反省して申し訳なく思っております。

望みの門は創立から随分変わりましたが京葉後援会は発足以来ずっと変わらざるの歩みです。委員は高齢化していますので、何か今風のやり方で支援が出来るようになればいいなと思ひ考えています。そして最近、年のせいか、望みの門を通して受けた恵みの数々を考へる事が多くなり本当に感謝です。皆さま方にクリスマススの祝福が豊かにありますようにとお祈りいたします。

## 東京望みの門 自立援助ホーム マナの家 ヘットキャンプ先生を訪ねて

指導員 植月 知子

今年の4月から東京望みの門・マナの家で働くことになり、自分のこれまでを振り返った時、MBKミッシヨンの宣教師の方々とつながりが、私をここまで運んできたのだと感じました。そして、東京望みの門で23年にわたって活動され、94歳の今もドイツで元気に暮らしておられるヘットキャンプ先生に、ぜひもう一度お会いしたいという願ひが生まれました。職場の皆様は大変だったことと思います

が、快く送り出してくださり、8月半ばに、MBKの歴代宣教師のうち、ヘットキャンプ先生、グロース先生、シェーア先生をドイツを訪ねる機会に恵まれました。

フランクフルト空港に到着すると、西千葉教会で私が大変お世話になった、シェーア先生が待っていてくださいました。

シェーア先生は私の希望をかなえて、ヘットキャンプ先生に会えるよう日程を組んでくださった、昨今は遅延ばかりと噂の長距離列車での移動をご一緒くださり、ヘットキャンプ先生が住むデュイスブルクに無事たどり着くことができました。

翌日、早速ヘットキャンプ先生をご自宅に訪問したところ、先生は大変歓迎してくださいました。ケルンからグロース先生も来てくださり、昔のこと、今のこと、これからのことをお話ししました。ドイツに帰国されて長い年月が経った今も、変わらず望みの門の働きに心を寄せ、日々祈っていてくださる宣教師の方々と過ごした時間は、東京望みの門の働きの原点を改めて考える機会となりました。

その翌日は日曜日で、再びヘットキャンプ先生のお宅を訪ね、ライブ中継されるベルリン大聖堂の主日礼拝にあずかりました。その後、ヘットキャンプ先生が用意してくださった昼食のメニューを、皆で一緒にお手伝いしてテーブルを整え、共に食卓を囲みました。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、お別れの時はとても名残惜しい気持ちでしたが、今回ドイツに行ったことで、ヘットキャンプ先生はスマートフォンを操るといふことを知り、メッセーシアプリでやり取りできるようになったのは、思いもよらぬおみやげとなりました。

日々の寮生との関わりに、どのようにしたら彼女たちにとって真の支援になるのか、考へることの多い毎日ですが、遠くドイツでも、私たちの働きを思い、祈り支えていてくださる方々がいることを折にふれ思い返し、日々の力にしていきたいと思っています。



## 女性自立支援施設 望みの門学園

## 懐かしい思い出



作業支援員 遠藤 利子

昭和55年12月18日紫苑荘に入職しました。私は小学生と幼稚園の子供がいたので泊まりが出来ないので厨房の仕事をする事になりました。利用者さんが50人と職員の食事とおやつは毎日手作りでした。早番が一人と学園の利用者さんと食器を洗いながら、お汁粉だったら団子を作りながら小豆を煮たり、とにかく大変でした。もっと大変なのはリングの芯をくりぬいてオープンで焼いたりするようなおやつが多く、おやつを出した後は、早番一人が食堂の掃除をして、終わったら遅番の人の手伝いをして3時の休憩が終って帰ったりしていました。急がしいですがやりがいのある仕事でした。必ず利用者さんが、とても美味いです有りがとうございますと言って下さる事が



毎日の励みになりました。

その後、楽

生園と合同に異動になる

為、引越しを

し、いざ仕事

をする事にな

り、あまりに

広くて最初は

楽生園と紫苑

荘合わせて百

人と職員の人

達の数が大変

でした。刻み

食の人と魚の

骨を全員分取

って刻みペーストと

とろみを付けたり、何をするにも頭の中に次

何をするか考えながら仕事をした事を思い出

します。それから新しく新生舎が出来て異動

になりました。まだ最初なので利用者さんが

3人で職員が8人でした。その内人数も、少

しずつ増えました。利用者さんは家から来る

ので毎日バスで迎えに行くのでバスに乗って

木更津駅まで行っていました。帰ったら、す

ぐ昼の用意をしました。昼食の時は利用者の

間に入って食べる事になっていたので、皆さ

ん楽しんで食べながら楽しく話しをしたり、

とても仲良く話しました。それから毎日のお

やつがやはり手作りなのでとても大変でした。

野菜が残ればそれで焼ソバを作ったりフルー



ツが残ればそれをジュースにして寒天を作ったり、時にはお好み焼きを作ったりしました。皆さんすごく喜んで食べ終ると大きな声で美味しかったですと声掛けてくれました。時にはよもぎやつくしを取って来て何かを作ったり、下さいとの事だったので、つくしは天ぷらにしたり、佃煮にしました。よもぎは、ゆでてペーストにして冷凍にして置いてお餅にしてバザーの時のお餅に使ってもらいました。

ある時金曜日によもぎを取って来たので月曜日までそのまま冷蔵庫に入れておいて月曜日にしたら一袋だけすごく生き生きした一袋があつて他の袋の中の少し弱っていたが何だろうと思いました。良く見ると他の草がかなりまじっていたのを見て考えました。もしかしたら雑草が水分をふくんでいる為に元気があったのかだったのかと思いましたが、それを取って来たのがメグちゃんでした。何げなく取って入



れていたのだと思いました。前に聞いた事があって夏に畑の草は取らずにそのままにしたほうがいいと言う人がいたのを思い出しました。なぜかと言うと草には水分がふくまれているから夏の間、野菜が水をあげなくても元気で夏を越えられるらしいです。草は一年じゅう元気なのを見るとやはり草はすごいと思いました。

私は次に学園に異動になりました。学園は二度目でしたが、最初は学園に行ったら2ヶ月ぐらいで合同に行くことになりました。それから又学園に行つて下さいと言われた時すぐに行きますと返事をしました。

一度目は私がダイエットをしていた時でした。学園だったらダイエットはわりだと思いました。でも私は学園が好きだったので良かったです。永い間老人ホームで働いていたので刻みかたが違う事もあるので最初は心配でした。やっぱりメロンの切りかたが違ふと言われてしまいました。それから聞いてから切ることにしました。味付けは聞かなくても出来るので良かったです。今は工房で編み物をしています。利用者さんは勉強をする人や編み物をする人がいます。時には話をしながら自分も編み物しています。今まで紫苑荘・楽生園・新生舎、学園と異動があり大変でしたが、いい経験になりました。今年でも望みの門44年生になります。

# 養護老人ホーム 望みの門楽生園

## 無理せず、自分らしく

給食サービスマン 栄養士 後藤 愛花

今年の春、望みの門に新卒として入職しました。最初のころは右も左もわからず、失敗してしまうことも多くありました。「早く一人前にならなきゃ」「もっと頑張らなきゃ」と焦る気持ちばかりが先に立ち、気づかないうちに自分を追い込んでしまうこともありました。そんなとき、先輩から「頑張りすぎちゃダメだよ」と声をかけていただきました。その言葉にハッと、肩の力がふっと抜けた気がしました。職種は違っても、温かく見守ってくださることに気づき、とても心が軽くなりました。一生懸命頑張ることも大切だけれど、自分のペースを大事にすることも同じくらい大切なのだと気づきました。

利用者さんの健康や食べやすさを考え、栄養バランスを意識した献立作りや調理員の方々との連携を通して、食事を安全で美味しいものにする大切さを日々実感し、栄養士としてのやりがいを感じています。利用者さんから「美味しかったよ」と笑顔で言ってもらえる瞬間は、何よりもうれしく、自分の原動力になっています。完璧でなくても、心を込めて一つひとつの仕事に向き合うことが、自分ら

しい働き方だと思えるようになりました。

また、バザーや感謝祭では、他の施設の利用者さんや地域の方々と直接関わる機会があり、多くの経験を積むことが出来ました。まだまだ学ぶことは多く、日々反省することもあります。周りの先輩方や調理員の方々、そして利用者さんに支えられながら、少しずつ成長していけたらと思います。

業務の中では迷うこともありますが、そのたびに優しく教えてくださる方々に感謝しています。これからも「無理せず、自分らしく」を忘れずに、利用者さんが安心して食事を楽しんでいただけるよう、笑顔と温かい気持ちを届けていきたいです。これからは栄養士の業務だけではなく、利用者さんとの関わりも大切にしながら、より身近に寄り添い、一日でも早く信頼される栄養士を目指していきます。



特別養護老人ホーム 望みの門紫苑荘

## 利用者様第一への心がけ

介護員 野口 智也

望みの門紫苑荘に入職してから一年と数か月が経ちました。

私は、幼いころより介護に触れる機会があり、常に隣り合わせの生活を過ごしてきました。幼き頃の私は正直、介護というものが好きではなく少し憎んだこともあり。自身の兄弟が事故により一生介護が必要な状態となり幼き頃の自分は親に甘える時間を介護ということに取られてしまった、と考えていました。

しかし、年齢を重ね介護という事に触れている時間が多くなるにつれ、私の考えや見方が自身の成長と共に変わり始めました。この方たちが居るから助かる人がある、増える笑顔がある。そう思うととても素晴らしく誇ら



しいことだと考えるようになりました。そして、自分自身にも何か出来ないか、そう思うようになり介護員としてのスタートをきりました。

様々な現場で介護の経験を重ね、高齢者介護に留まらず障害者介護にも従事し今に至ります。当法人に入職してからは、基本理念・福祉方針に感銘を受け自身がどうあるべきか、どうしていくべきかを今一度見つめ直す良いきっかけとなりました。介護の経験は長いですがのぞみ会ではまだまだ新人です。先輩方に多くの叱咤激励を頂きながら本日も業務しております。

何より、利用者様の笑顔を大切に気持ちよく日々を過ごして頂けるように心掛けています。その為にも自身を成長させながら、多くの経験を積んでいきたいです。多くの人の意見を頂きながら時には率先して自身の意見を伝え利用者様がここに来て良かった、この場所にいる事が幸せだと感じて頂ける環境を提供していきたいと思っています。

特別養護老人ホーム 望みの門富士見の里  
事務員外部研修を終えて

事務員 明石めぐみ

法人内では、年間を通じて職階別での研修が計画され実施しています。しかし、職種別



の研修はほとんど行われていないと記憶しています。昨年11月頃より研修内容を検討し、令和7年9月26日、各施設の事務員11名で「東京消防庁本所防災館」へ研修に行き、事務員による初の自主企画研修を実施しました。

初めての試みに不安もありましたが、地震や災害に備え、少しでも対応力の向上を目的としたもので、さまざまな防災体験を通じて知識と意識を深める貴重な機会となりました。

中でも特に印象的だったのは、震度7の地震を疑似体験したこと。これまで経験したことのない激しい揺れに、体験後もしばらく足元がふわふわするような感覚が残り、災害の恐ろしさを、身をもって実感しました。

体験後は東京駅構内で昼食を購入し、貸会議室へ移動して反省会と意見交換を実施。普段は富津地区・湊地区と勤務地が離れている為、事務員が一堂に会するのは月1回の会議

のみ。今回は事務員だけの空間で、日々の疑問や悩みを共有し合い、気づけば2時間半があっという間に過ぎるほど、充実した時間となりました。

このような貴重な機会を設けて下さった大貫課長・研修参加の許可をくださった施設長の皆様には心より感謝申し上げます。

事務員の仕事は、日々の努力が目に見えにくく、一人で悩み、時には悔しさや辛さを感じることもあります。それでも知識を共有し、相談し合える仲間がいる。そして頼れる上司がいてくださることは、私にとって大きな支えです。これからも事務員同士のつながりを大切に、日々努力を重ねてまいります。

### 老人デイサービス事業 望みの門デイサービスセンター 10年後もどきどきしくお願ひいたします

介護員 安藤 佳子

この度は法人機関紙「望みの門」第100号発行おめでとうございます。この記念すべき100号に寄稿させていただき大変光栄です。実は私も今年で入職して10年目を迎えました。10年の中でデイサービスセンター、君津ふくしネット、新生舎の3つの事業所に従事しました。仕事の中で理想と現実の違いやご利用者様からのニーズに対応した支援がで



きず、自分の實力不足に自信を失うこともありました。しかし、ご利用者様から「ありがとう」の一言が私の励みとなり、今日まで社会福祉の業として人を支える仕事に携わることで感謝でいっぱいです。

10年を経て、我が子たちも高校生になり身の回りのことをだいたい一人でできるようになってきたので、息抜きとして畑仕事やズンバをして自分の時間をつくりはじめました。同じ職場の方と仕事が終わった後ズンバへ一緒に参加し、踊って汗をかいています。まだ習い始めたばかりで動きがまだついていきませんが、畑仕事は、本を読みながら季節の野菜を作っていますが、「間引き」「土づくり」など初めて聞く言葉ばかりです。何をどうしたらいいかわからず、法人内の大先輩職

員へ写真をおくって野菜の状況をみていただき、次はどうしたらいいか直接アドバイスをもらっています。

今私がつづけていることが10年後成長できていたら嬉しく思います。そのために私は周りの方に支えられて成長できているのだと感じる今日この頃です。

### 千葉県中核地域生活支援センター 君津ふくしネット 地域とつながりながら

相談支援員 山口 祐樹

「障害のある方が地域で暮らすこと」について障害者グループホーム（以下GH）を主軸にして一緒に考えるのが、私の仕事です。難しそうに聞こえますが、実はたまにドラマチックな日があったりします。ある日、地域で暮らしている方から「GHに入りたい」と相談の電話をいただきました。さっそく自宅に伺うと、テーブルの上に置き手紙。「やっぱりもう少し先にしたい」と書かれていました。住み慣れた場所を離れる不安や、家族のこと、これからの生活への迷い…。その一枚の手紙に、たくさんの方の気持ちが詰まっているように感じました。

また別の日。自立援助ホームから自立を目指す20代の女性がいきました。アルバイトの面

接を受けては、お断りの手紙をもらう日々。落ち込んでいた彼女ですが、地域の支援者とともに就労継続支援B型の事業所を紹介すると「アクセサリー作れるんですか?」とちょっと笑顔に。今では作品を作りながら「これ、私が作ったんだよ!」と誇らしげ。入居するGHも決まり、最近ではすっかり前向きな表情です。「B型なんて…」と言っていた頃を思い出すと、こちらまでじんわり嬉しくなります。GH等支援ワーカーは、地域で暮らす方、これからホームを利用したい方、すでに入居中の方など、いろんな方と関わる仕事です。もちろん私一人ではなく、GHの職員さんや家族、医療機関、地域の関係者の皆さんと一緒に「どうしたらその人らしく暮らせるかな?」と考えながら支援しています。GH事業者に対する運営支援も行っています。まだまだ知識不足で思うように動けない日もありますが、関係機関のみなさんと力を合わせるうちに、少しずついろんな方の笑顔が増えていくのを



見ると「やっぱり福祉の仕事、いいな」と感じます。まだこの仕事を始めて1年ちょっと。「ちょっと相談してみよう」と気軽に声をかけてもらえるような存在になることが今の目標です。今日もまた電話が鳴ります。「ちょっと聞いてもいいですか?」新しい出会いにワクワクしつつも、隣に座っている先輩ワーカーに泣きつきます。

### 富津市富津地区地域包括支援センター 「ご縁亀」で「ご縁」の「元氣」をもらおう

看護員 岡 和子

「ご縁亀」をご存じですか?「五円(ごえん)」に「ご縁」を掛けて、亀の甲羅部分に五円玉を編み込んだ亀のストラップです。「良いご縁がありますように」という願いが込められています。

富津地区包括支援センターへ配属となり早いもので約1年半が経過しました。配属当初は包括支援センターの業務がどのようなものか分からず、慣れない業務で心身共に疲労を感じた日も多かったように思います。包括支援センターの業務のひとつに介護保険の要支援判定を受けた利用者様が必要な介護予防サービスへつなぐ業務があります。

配属当初、数名の利用者様を担当させて

いただき、定期的なモニタリング訪問や介護保険更新のお手伝いなど



を行いました。現在40名弱の利用者様を担当させて頂いてありますが、当初関わっていただいた利用者様とは現在も関わらせていただいております、その利用者様の一人にSさんという女性があります。Sさんは表題の「ご縁亀」を趣味で製作している方です。Sさんから初めて「ご縁亀」を見せていただいた時に思わず開口一番「可愛い!」。以来、「ご縁亀」の魅力に惹かれています。Sさんより「ご縁の印」といづつか可愛い「ご縁亀」を頂いたので、早速訪問バッグに付けています。それと周囲にも「ご縁」のおすそ分けとして渡し、喜ばれています。

「ご縁亀」は見た目もちろん可愛いのですが、何より私が感心しているのがSさんがご縁をととても大切にされているというところです。Sさんは自身に関わる人や、すべての事柄に感謝されており「いつも助かるよ」「ありがとう」「楽しい」「うれしい」とポジティ

ブな言葉をとても多く使われています。そのようなSさんですので、もちろん私が訪問した際も「いつも本当ありがとうございます」(「デイサービス」のおかげで楽しく過ごさせてもらっているよ)などこちらが嬉しくなるような言葉を掛けて下さっています。そのような関りを持たせてもらう中でいつしか自分自身の心身の疲労が和らいでいたように思います。「ご縁」に感謝し、その気持ちを言葉にして表す。そして気持ちを「亀さん」に乗せて周囲の皆さんに「ご縁の感謝」を広げておられるSさんの姿勢が素晴らしいと感じ、このような人間でありたいと学ばせて頂いております。昨年、米寿を迎えられたSさん。これからも柔らかい笑顔と温かいまなざしでどうぞご縁をつないで下さい。

### 就労継続支援事業 望みの門 新生舎

## 出店活動を通じて広がる地域との繋がり

事務員兼生活支援員 妻木 真希

新生舎では、富津市のバザーや君津市のふれあいまつり・各種イベントへパンやクッキーなどの販売を「出店」という形で行っています。出店時の売上は利用者様の工賃となる為、貴重な機会となっております。また新生舎の製品は、年間を通して、「委託販売」

の形でも多くのお客様に届けてられています。

具体的



には、J Aみらい 貞元店様 やタカヨシ「わくわく広場様」(富津市・木更津市・市原市)などです。クッキーに関しては、富津市から千葉市(県庁内ショップなど)までの広い範囲で多くのお客様に手に取っていただいています。

出店に携わる中で、お客様から温かいフィードバックをいただく機会が格段に増えました。委託販売先で購入されたお客様が「美味しかった!」と声をかけてくださったり、「○○のパンはありませんか?美味しかったです!」と特定の商品を求めてくださることもあります。また「このジャムリングが美味しいのね!」等の言葉をいただく美味しさを共感しながら販売を楽しませて頂いています。以前は「販売することに必死」でしたが、今はお客様との対話を楽しみながら販売することの喜びを徐々に感じています。

さらに、今年の出店活動を通じて、のぞみ会の他の事業所の話を聞く機会が増えたことになっていました。「○○さんにはお世話になっていました」「知り合いで、のぞみ会のデイサービスに行っている方がいます」といったお言葉は、私たちが出している商品だけでなく、のぞみ会全体が地域社会の皆様を支えられ、また貢献していることを強く認識させてくれました。昨年誕生したのぞみ会のキャラクターの「キーボウ」も出店に連れて行っており、可愛いと大変評判でとても嬉しいです。

私たちは、この出店活動を通じて得られた地域との深いつながりをこれからも大切にしていきたいです。利用者様と共に作り上げた商品を提供し続けることで、のぞみ会全体として地域社会への貢献に繋がる事ができます。と思います。



# 共同生活援助事業 グレースホーム

## 心機一転!!



世話人 渡邊 祥子

6月、望みの門に入職し楽生園に配属となりましたが、腰痛の悪化により介護の仕事に支障が出てしまい、かずさの里へ異動となりました。その後心身の不調から業務継続が難しくなり、今後について相談させて頂いたところグレースホームのお話があり、8月中旬に2週間ほど業務体験として、グレースホームに関わらせて頂きました。

数日の体験でしたが私にとってはとても楽しく有意義な時間でした。利用者さん達が言い合いをしたり、仲良くおやつを食べていたり。こういう



う空間で仕事が出来たら楽しいだろうなと思えました。

望みの門入職前、老人施設で12年間働いてきました。が、障害を持つ方々と接する事はあまりなかったもので、自分に出来るかとても心配でした。



その後、正式にグレースホームへ配属になりました。まだ働き始めて2ヶ月半程です。日々わからないことだらけです。どういう言葉で注意したらいいのか? どういう接し方が適切か? この人の障害の特徴は? 文字の読み書きなどはどのくらい理解しているのか? ちゃんと伝わっているのか? など、毎日疑問を頭に思い浮かべながら関わっています。グレースホームの業務の中で、困ったことや分からない事については、すぐに職員の皆さんに質問します。すると、必ず誰かが返事をくださるので安心して業務を進めていくことが出来ます。とても助けられています。

ホームの利用者さん達との関りの中で気づいたことですが、利用者さんはカワイイ嘘をつきます。「あれ?」と立ち止まり考え、よく聞いて対処するようにしています。内容は「あの人がこう言った私はこう伝えたのに」などです。一つ一つ、丁寧に向き合っていくことを心掛けています。毎日の業務は「ご飯作り、受診の付添、朝の送迎など」をしています。新人の私に出来る事はまだ少ないですが出来る事からコツコツと業務に取り組み、行事なども利用者さんと一緒に楽しんでいきたいです。

これからのイベントは旅行、ホームのクリスマス会があり、皆さんと一緒に過ごすことをワクワクしながら楽しみに待っています!!

## 児童養護施設 望みの門かずさの里

### 望みの門感謝祭を紡ぐ

施設長 佐京 正範

2025年11月3日、児童養護施設「かずさの里」にて、地域に根ざした感謝祭を盛大に開催することができました。これまでも地域の皆さまに対し、法人職員と児童が一体となり、日頃の感謝の気持ちをお伝えする場として開催して参りました。特に今年は開設20年を12月に控えたかずさの里で特別なイベントを企画するか悩みつつ、これまで同様に自

然体で、いつもどおりの感謝祭にと。何より戸波前施設長がこれまで築いてきた地域との繋がり・絆を引き継ぐ想い。受け継いだ者が背負う責務として私自身の目的を「地域と築いた繋がりを紡ぐ」。背伸びせず、そこに定めました。

昨年の感謝祭は開設後初めての土砂降り雨。凍える寒さ。お越し頂いた皆様に恐縮する想いでした。今年はいよいよ3連休の最終日。企画準備をする側にとっては悩ましい日取りでした。

ですが、菊込副施設長を筆頭に里の職員各々が献身的に下支えし、そこに法人から沢山の応援協力を得て、開催にたどり着いたことに深く感謝しております。

そして11月とは思えない暑いほどの天候に恵まれた当日。大勢の



お客様をお迎えすることが叶いました。模擬店やバザー会場に集ってくださる。みなと幼稚園

園鼓笛隊の可愛らしさと一所懸命さに心打たれ、天羽中・天羽高合同ブラスバンドの丁寧で繊細な演奏に聴き入る。幸福感と安堵。素晴らしい時間を共有しました。

20年を迎えるかずさの里。これまで多くの皆様に支えられ、地域に育んでいただいた19年間です。今もなお様々な課題に直面しており、職員の疲弊感も高まっています。私どもがぶち当たる壁のようなものは地域の皆様には見えません。

しかし日頃お付き合いさせていただく中で、労い合いと感謝を伝え合う地域性があるにはあります。恵まれたこの地で井の中の蛙ごとく施設の中で疲弊せず、俯瞰し、感謝し合う職員同士でありたいと思います。それこ



そが、育んでいただいた地域の皆様への感謝と恩返しと信じます。



## 乳児院 望みの門方舟乳児園

## 子どもたちと一緒に



保育士 島田 若葉

望みの門方舟乳児園で働き始めて2年目になりました。この2年間でたくさんを経験することができました。オムツ交換や授乳などの日々のお世話や季節の行事、実践発表大会での発表もしました。たくさんの方の失敗もあった2年間で、なかなか泣き止まることができない子のお世話はとても大変だと感じる事もありますが、子どもたちと触れ合い、子どもたちのことを愛おしいと感じるこの方が大きいので、保育士になり、この仕事をさせてもらっていることにとても感謝しています。



乳児院には、とても大変な環境で産まれた子どもたちが入所してくることが多いですが、子どもは産まれる前に自ら親、環境を選んで選んで産まれてくるのだと以前聞いたことがあり、私は新しい子どもが入所してくると、その子はすごく強いのだな、と感心しています。家庭に戻っていく子ども、里親さんが見つかり退所していく子ども、新しい施設に移っていく子ども、それぞれの場所で幸せになってほしいと心から願っています。私は、望みの門方舟乳児園で、大切な乳児期の子どもたちにたくさん触れて、愛を届けることができました、何よりも幸せです。

## 児童心理治療施設

## 望みの門木下記念学園

## 10年務めて



児童指導員 宅見 奎亮

私が入職して10年が経ちました。この機関紙の原稿作成も3回目になります。のぞみ会へ入職してから様々な経験をさせていただきました。入職前までは別の業界で数年働いており、福祉という業界をまったく知らなかった私にとってこの10年は驚きと初体験の連続でした。物を作り数字を追うのではなく、人をみて寄り添い学んでいくことの連続だったように感じています。その中で印象に残って

いることが木下記念学園の立ち上げです。立ち上げでは入職1年も経たない私が前例・経験のある人間がいないという状況下で、入職後に得た知識と経験、

そして様々な人の力をお借りしてがむしゃらに働いていたことを覚えています。

その間、様々な方が入退職されていき、たくさんの児童が入退所していききました。その都度、自身の未熟さややるせない気持ちがたくさん湧いてきたことを昨日のように覚えていきます。ただ、色々な経験をして成長をしていく実感もありました。その中で大人からは経験と知識を、児童からは笑顔と勇気をたくさんもらいました。

今、私は木下記念学園で働いています。入職してからずっと児童に携わる業務へ従事させていただいております。今日まで気持ちも立場も変わることなく過ごしてきました。





ます。支援、業務において何をするにもやはり一人では限界があることを感じ、その度に協力するということの大切さを再確認しかみしめています。

今後は今まで以上に自分には厳しく他者には優しくを意識し、自己研鑽を怠ることなく明るい未来への歩みを進めることができたいと思います。そして自身が福祉に身を置くことなく様々な形で色々な人たちと手を取り合い、学び、よりよい未来を作っていこうと思います。



心理相談員 齋藤 美紀

「春の大三角形の1つのアークトゥルスは、みはり星とよばれています。それは星

座になったくまのおやこをいつも見まもっているからです」10月期のTBSドラマ『フェイクマミー』は、会社を経営しながらシングルで娘を育てている母親の代わりに、小学校での母親の役割をするフェイクマミー（フェイク母）の物語です。第3話では、娘がプラネタリウムで聞いた星座の話から、フェイクマミーのことをみはり星に重ねて書いた作文が感動的でした。

子どもが体調不良のとき、子どもの癪癪が酷いとき、子どもと対立したとき、子どもが不登校になったとき、誰かもう一人大人がいてくれたらなと思う経験がある人は多いのではないのでしょうか。

このドラマを見てみると、そういうとき頼りになるマミーがいてくれたらどれだけ心強いのだろうと思わされます。子どもに寂しい思いをさせていることはわかっていても責任のある仕事を放棄できない母親のジレンマを理解し寄り添う。また、いろいろな言葉を飲み込んで寂しい気持ちをたくさん抱えている子どもの気持ちにも寄り添う。どちらも悪者にならない。母だけ、子だけではなく、親子を見守ってくれる、まさに「みはり星」のような存在です。

しかし、現実にはドラマのようなマミーは存在しません。平安時代の貴族は、正妻の家に夫が入り、それ以外の夫人（妾）のもとへ



は個別に通う「通い婚」で、子どもは母親の家で育てられていたそうです。母親とは別に乳母もいます。一夫多妻の時代だからこそ、「通い婚」が合っていたのかもしれない。この時代に、子どもを守る環境を整えるにはそれしかなかったのかと私は思いました。時代が変わり、家族の形も変わっていきます。児童福祉の現場では、子どもは社会で育てるものだという言葉をよく耳にします。ピーターパンの家では、フェイクマミーのように母の代わりに学校の保護者会に参加したり、子どもと一緒に留守番をしたりすることは出来ません。

しかし、相談に来てくださる方に、この人たちは私たち親子に寄り添ってくれて信頼できると思われる「みはり星」のような存在になれたら良いなと思っています。

## 第12回 望みの門職員 実践発表大会

9月13日(土)第12回望みの門実践発表大会を君津生涯学習交流センターで開催しました。座長に植草学園大学発達教育学部教授久留島太郎先生、いわき短期大学子ども未来科専任講師宗政朱利先生、特定非営利活動法人東京YWCAヒューマンサービスサポートセンター田島誠一様をお迎えして、望みの門の12事業所が『地域の役割と支援』『ケア・サービスの向上』『業務改善』の3群にわかれそれぞれ日ごろの取り組みについて発表しました。

望みの門の関係者のみならず地域の関係機関の皆さまや茨城県から同じキリスト教精神に基づく社会福祉法人ナザレ園の菊池譲副理事長にもご参加いただきました。どの事業所も忙しい中、業務と並行して良く準備された中身の濃い発表であったと思います。

これからも望みの門は利用者の皆さま、地域の皆さまにキリストの愛をもって仕えることをモットーに歩んでまいります。厳正な審査の結果、最優秀賞には児童家庭支援センター望みの門ピーターパンの家の「地域支援、重層的支援実践報告」多職種連携による有機的な地域支援」、優秀賞には乳児院望みの門方舟乳児園、審査員特別賞に富津市富津地区

地域包括支援センターと法人事務局、敢闘賞に特別養護老人ホーム望みの門富士見の里が選ばれました。



## 本当は一年がかりの米作り

法人地域貢献活動  
稲作事業担当

森 和浩

法人で稲作を始めたのは2008年(平成20年)のことです。当初は田圃4枚。普通の農家1軒が自分の家で食べるほどの広さ。竹やぶや身の丈ほどの草が生い茂る耕作放棄地は農家の高齢化と後継者不在という日本の農家の厳しい現実がそのまま映し出されている姿でした。「耕すだけでも」という要望でしたがせっかく農地として活用できるようにそのままではと一念発起。稲作事業がスタートしたという訳です。

あれから18年。現在では耕作面積も2ヘクタールを超え、今年は8月28日に稲刈りとなり収穫量は8・8トン。米袋にして293袋にもなりました。風に揺れる若葉。黄金色に輝く一面の稲穂。刈り取りの後の感慨深い思い。一年の苦労が新米となって届く時の感激。八十八の苦労というものをどれだけの人が理解してくれているでしょう。実は刈り取りの終わった後の9月中旬から来年のための作業がもう始まるのです。

コンバインで刈り取った後の田圃には稲わらが細かく裁断されて撒かれています。この



まま放置するのではなくトラクターで田圃に漑き込み来年の肥料として活用します。田圃1枚耕すのに大体2時間。一日で2枚耕すのがせいぜいで11枚もあるわけですからそれだけでも6日かかる作業。弁当持ち込みで一日中トラクターと過ごします。

これを12月にもう一度行います。これは田圃の土が冬になって硬く締まってしまい、再び耕し空気を含ませることで微生物の活動を促し稲わらの発酵を促進します。

年が明けて寒い2月からは田圃の周りの畔に土を盛る「くろ塗り」という作業が始まります。トラクターに別の作業機を載せ替え、田圃の淵を耕して土を盛り、回転するローラーで固めて水が抜けない様にするための作業です。見ていて面白いのですがとてもゆっ

くり。後方の作業状態を見ながらの運転は首と腰が痛くなります。一日作業しても田圃2枚終わるかどうか。天候にも左右され一か月かかることもあります。それが終わると田植えに向けた作業の開始です。先ずは田起こし。全ての田圃を耕し直します。4月には用水路の水が通り始め、田圃に水を引き込みながらトラクターで荒代掻き作業をします。水を含ませた土をトラクターでかき回しながら田圃の土を水平に保つように耕します。どうしても四隅に土が寄ってしまうのでロータリーの逆回転などを駆使して作業するのですがとて



も技術のいる作業。それが終わると本代掻き作業という田植えができる状態の田圃に仕上げていく作業です。土と水を高回転でかき回し、粘土質を水面近くに浮かせて苗を植えやすい状態にするのがこの作業なのですが、水面は濁りどこをやったか分からなくなってしまう感覚作業。田圃の向こう側に目標を定めかなり集中して運転しています。トラクターで水遊びしている様に見えますがとても重要な作業をしているんです。4月25日の田植えに合わせて田圃を仕上げていくには逆算して作業を段取りよく進めていかなければなりません。そしてようやく迎えた田植え。前日に種苗センターから苗を運び、当日は朝から田植え機が唸りを上げます。2ヘクタールですから故障しても休んでいても終わりません。人間が機械と一体になって働かされるという感覚になります。田植え機に乗って作業する人と苗を運ぶ、肥料を補充する、水を調整する人など周囲全般の役が必要です。二日間かけてようやく終わると一面に植えられた幼少の苗に大きく育ってくれよと祈るような気持ちになります。

さて、これからが大変。生育に合わせた管理は天候との闘い。幼少期は水の調整が特に必要で少なくとも多すぎてもダメ。適度という水量を毎日2回見て回ります。大雨や強風にも水量の調整は必要です。暖かくなると稲

の成長とともに周囲の草も元氣よく伸びます。2週間かけて草を刈っても最初に刈った場所はまだ伸びてしまします。猛暑日も続き休憩を多くとりながらでもたいてい人間の方が負けます。

田圃の中にも粟やヒエといったイネ科の雑穀も生え始め専用の除草剤を散布。それでも残ったものは手で抜くしかありません。8月のお盆までこんな作業が4か月続きひと際こんがりとし焼けしたオジさんになるわけです。7月中旬には稲穂が出始め、しばらくすると一斉に出そろい白い小さな花が田圃一面に咲きます。多くの方は見たことがないと思います。ひと粒一粒に花が咲く姿は命の息吹というものを感じます。お盆を過ぎるころにはもう稲刈りに向けて水量の調整と刈り取り期日の調整をします。順調に育てば9月初旬に稲刈りとなりますが、富津地区のどこの田圃も同じように生育していますからどこから刈り取りを始めるかは刈り取りを依頼している農協が判断。天候とライスセンターの乾燥機の稼働状態を見て「明日行きますよ」と突然電話が入ってくるようになります。いつ稲刈りになっても大丈夫なようにコンバインの入る通路は草刈りをして、オペレーターと補助員、搬送車のドライバーへの冷たい飲み物と望みの門新生舎のパンは必ず準備をします。

一年間の作業を積み重ねようやく迎えた稲刈り。コンバインがスムーズに刈り取ってしまふ姿は何かあつてなく、苦勞し育てたのがこんなにも簡単に片づけられてしまうのかという気持ちにもなります。とは言え全て刈り取った後の田圃はやり遂げたという充実感と収穫量への期待感が膨らむ瞬間です。

ライスセンターで乾燥と糊摺りを終え、1週間ほどで玄米の搬入作業となります。トラックにフォークリフトで積載してもらい、新生舎の保冷庫に運び込むのは人海戦術。各施設の職員の応援を得て30kgの袋をトラックから下ろししては台車に乗せ、保冷庫で10段に積み上げます。その数293袋。最初はみんな元氣が良かったのですが3台目、4台目には無言。「あと10袋」というありがたい声で残る力を振り絞る。こうして一年かけて育てた米が法人内の給食で提供されることとなります。

「新米、いいねー。美味しかったよ。」と利用者さんの声は一番の喜びでもあります。米騒動もあった2025年。8・8tの新米は法人給食の半年分ほどにしかありませんが、この美味しさの中に「こんな苦勞があるんだ」と感じていただけたら幸いです。

多くの皆様の一年間の応援と協力に改めて感謝いたします。では「いただきます!」

## 2025年望みの門 京葉後援会研修会報告

10月30日望みの門本館シオンホールを会場に2025年望みの門京葉後援会研修会が開催されました。望みの門京葉後援会は千葉県キリスト教会を中心に教会やキリスト教関係団体が望みの門をお支え下さる後援会です。この日は28名の会員の皆さまにお集まり

いただきました。毎年望みの門の施設の紹介等をさせて頂いていますが、今年は富津市富津地区地域包括支援センターの働きを報告させて頂きました。地域包括支援センターは、高齢者が住み慣れた地



域で安心して暮らし続けられるよう、介護・医療・福祉・保健の面から総合的に支援する公的な相談窓口となります。また同時に「認知症サポーター養成講座」を受講して頂き実技も含めたいへん楽しく、ためになる研修会となったのではないかと思います。ご参加の皆様ありがとうございます。



## 2025年逝去者記念式

11月4日(火)法人納骨堂にて2025年逝去者記念式を坂井栄一牧師の司式にて執り行いました。納骨堂には1953年以降29体のご遺骨が納められています。また2024年10月から2025年9月までの1年間に天に召された利用者、元職員は45名となります。これらの皆さまのことを覚えて代表の職員が礼拝をお捧げしました。礼拝は故人の信仰と生涯を偲びつつ、神様への感謝と賛美を捧げ、ご遺族や参列者が希望と信仰を新たにするため



に捧げられます。この地上での死は「終わり」ではなく「完成」や「目的の達成」とも捉えられ、そうした希望に満ちた視点から、故人と神様との関係を讃美し、私たち自身の生き方を見つめ直す良い機会となりました。

## 「望みの門」100号を祝って



理事長 木下 宣世

普段、気にもかけずに読んでいた「望みの門」誌が100号を迎える

聞いていささかの感慨をおぼえた。

100号ともなると第1号から積み重ねてきた歴史の重みを感じる。それはまさしく望みの門の働きの歴史である。

最近の「望みの門」の内容は当法人の全ての施設・事業所の職員の投稿である。ベテランの職員もいれば、新人もいてバラエティーに富んでいる。

それぞれの職場における働きの様子や、自分が感じた事や考えている事などが記されていて、読んでいて楽しい。そして何よりも嬉しさを感じるのは全体として姿勢が前向きであることだ。

もちろん、誰もが困難を抱え、苦勞している事があるに違いない。けれども、その中にあるのも一生懸命励んでくれている。そこにあるがたさを感じるのである。

やはり一番大事なのは職員間の理解と友和ではなからうか。「愛をもって仕える」は我々のモットーであるが、それは対利用者へのあり方であると同時に職員同志の関係において

も生かされねばならない。

そうすればもっと働きやすい職場となり、たいがい困難は乗り越えられる。そのような職場作りを目指して欲しいと願っている。

「望みの門」はこれからも広く、多くの人の原稿を載せて欲しい。これは「望みの門」の特徴であり、他にもあまり類を見ない。これを一冊の本にまとめたなら、これまでの記念誌とはまた違った当法人の歴史書になるだろう。沢山の人から原稿を集めるのは編集者にとっては仲々苦勞するところではなからうか。

100号を迎えるに当たり、これまで編集の労を取って下さった方々に心から感謝し、今後150号、200号を目指し、「望みの門」が歴史を刻み続けられるよう願う次第である。

## 編集後記

令和の就職戦線において、Z世代の選択眼はまるで高性能AIのように冷静かつ合理的だ。官僚・県庁・市役所―全てに合格したとして、彼らは給与や福利厚生がほぼ同じなら迷うことなく「責任が最も軽い市役所職員」を選択する。まるで人生というゲーム攻略のアプリをダウンロードしプレイベートを満喫しているかのようだ。彼らは定時退庁とワークライフバランスの死守に全集中する。責任の重さよりも心の軽さを愛おしむのだ。

一方「困難な問題を抱える女性に寄り添う」と望みの門を創設した木下ドーラは戦後まもなくドイツから来日した志士である。彼女は重責を「筋トレ」と捉え、女性の悲鳴をバーベルのように持ち上げた。Z世代が「定時退庁」を訴えるなら、彼女は「定時退庁？それって都市伝説？」と一笑に付すであろう。Z世代は「自分の人生を最適化」する。一方、志士は「社会の未来を最適化」するのである。どちらも人間らしい選択だ。とはいえZ世代の合理性も志士の情熱もどちらかが正義というわけではない。むしろ両者が共存することで社会はバランスを保つのである。市役所職員が地域の安心を支え、官僚が制度の骨格を築く。どちらが欠けても社会はうまく回らない。そして時代は変わる。かつては「滅私奉公」が美德だったが、今は「自己肯定」が力になる。Z世代の選択は単なる逃避ではなく「持続可能な働き方」への問いかけでもある。彼らは「燃え尽き症候群」を避け「燃え続ける人生」を設計しているのだ。

さて、私たちはどちらを選ぶ？「自分の心の軽さ」なのか「責任の重さ」なのか。それとも「心は軽く重責ともしっかりと向き合う」という新たなハイブリッドの創造なのか――もしかしてそれが次世代の望みの門の職員像なのかもしれない。責任と自由、使命と余白。その間に揺れる若者たちの選択は社会の鏡であり、未来への問いかけでもある。